

トビウオ通信 (9月号)

(本誌はホームページでもご覧いただけます。)

<http://www2.pref.shimane.jp/suisi/> (TEL 0855-22-1720)

《平成 16 年夏の漁況を振り返って》

今月号は島根県の夏の漁業として代表されるばいかご漁業・しいら漬け漁業・とびうお漁の3種類の漁業について、今漁期の漁況を振り返ってみます。

ばいかご漁業

エッチュウバイの漁獲量は前年並みだが大型貝の価格安で漁獲金額は減

石見部および出雲部のばいかご漁業は、小型底びき網漁業休漁期の6月から8月にかけて行われています。今年度の稼働隻数は6隻(石見部5隻、出雲部1隻)です。

今漁期のばいかご漁業における総漁獲量は106トン(前年比100%)、総水揚金額は5,441万円(前年比87%)で、量は前年とほぼ同じですが金額は前年をかなり下回りました。総航海数は198日で前年(191日)をやや上回りました。図1に1隻当たりのエッチュウバイの漁獲量と水揚金額の推移を示しました。1隻当たりの漁獲量は最近5年はほぼ横這いですが、水揚げ金額の減少が目立ちます。エッチュウバイの単価はここ数年下降しており、特に今年度は大きく低迷し平均価格は前年(496円/kg)を大きく下回る422円/kgでした。特に大～特大銘柄の貝の価格低下が顕著で、一時は200円台にまで下落しました。このため今年から各漁船に海水冷却装置を設置して、漁獲したバイの高鮮度化・高付加価値化を目指す取り組みも始まっています。

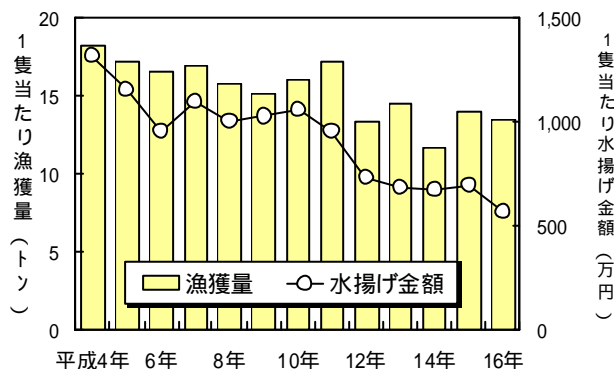


図1 石見部および出雲部ばいかご漁業におけるエッチュウバイの1隻当たり漁獲量と水揚金額の推移

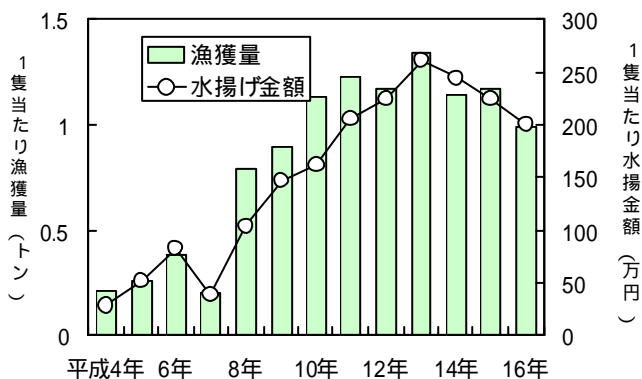


図2 石見部および出雲部ばいかご漁業におけるエビ類の1隻当たり漁獲量と水揚金額の推移

大きく下回る422円/kgでした。特に大～特大銘柄の貝の価格低下が顕著で、一時は200円台にまで下落しました。このため今年から各漁船に海水冷却装置を設置して、漁獲したバイの高鮮度化・高付加価値化を目指す取り組みも始まっています。

また、ばいかご漁業ではモロトゲアカエビ、イバラモエビ等のエビ類も混獲されますが、これらエビ類の漁獲量は5.9トン(前年比87%)、水揚金額は1,199万円(前年比82%)で、量・金額ともに前年を下回りました。図2に1隻当たりのエビ類の漁獲量と水揚金額の推移を示しました。これらのエビ類の漁獲量は平成13年をピークに減少傾向が続いており、資源動向

に注意していく必要があります。また、今年にはばいかご漁でミズダコも多く混獲されており新たな資源として注目されます。



図3 船上海水冷却装置と漁獲されたエッチュウバイ

しいら漬け(まき網)漁業

漁獲量は平年よりやや増えたがヒラマサの極端な不漁とシイラの大幅安値で漁獲金額は大幅減

シイラなどの回遊魚には物陰に寄り添ったり、集まったりする習性があります。これを利用した漁法が「しいら漬け」です。海面に漬木(つけぎ)と呼ばれる竹の筏(いかだ)を浮かべ、流れない様に固定しておいて、そこに集まった魚を網で捕獲するという「まき網漁業」の一種です。島根県ではこの漁法が盛んで、主に6~8月、県中・西部の石見地区を中心に、小型底びき網漁業の休漁期に行われます。

今年6~8月漁期の「しいら漬け漁業」による石見地区(大田・和江・五十猛・仁摩)の水揚状況は、漁獲量が571トン、水揚金額は6,123万円と、平年(過去11年平均)に比べ量は107%とやや増加しましたが、金額は44%まで大きく減少しました(図4)。

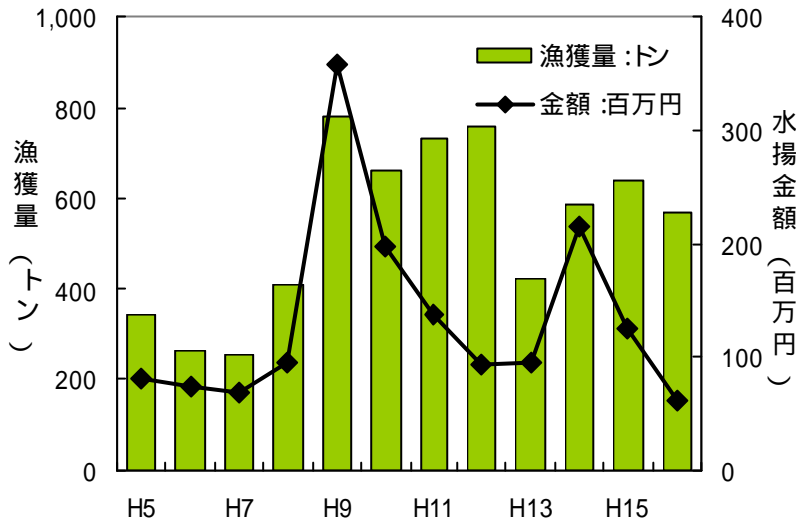


図4 しいら漬け(まき網)漁業の漁獲動向

水揚金額が大幅に減少したのは、漁獲の95%を占めたシイラの単価が92円/kg(例年130円/kg)と非常に低かったことと、単価の高いヒラマサの漁獲量がわずか1.7トンと極端に少なかったためでした。

また、シイラの単価が低迷した為、漁期途中には漁獲制限を行いました。

また、シイラの単価が低迷した為、漁期途中には漁獲制限を行いました。

とびうお漁

ここ数年漁獲量が低迷し今年(昨年よりは回復したものの平年(過去11年平均)の約7割)の漁獲

トビウオ類は冬の間は南方で生活していますが、暖かくなると産卵のため山陰沿岸に回遊してきます。島根県には毎年5~7月に来遊し、刺網、定置網、船曳網、まき網などで漁獲されます。トビウオはアゴ野焼き(竹輪)を始め、アゴだし(焼きアゴなど)、開きなどの加工原料として重要であり、もちろん鮮魚としても利用されます。本県で漁獲されるトビウオ類は主に、ツクシトビウオ(角アゴ、角トビ、大目)とホソトビウオ(丸アゴ、丸トビ、小目)の2種類です。

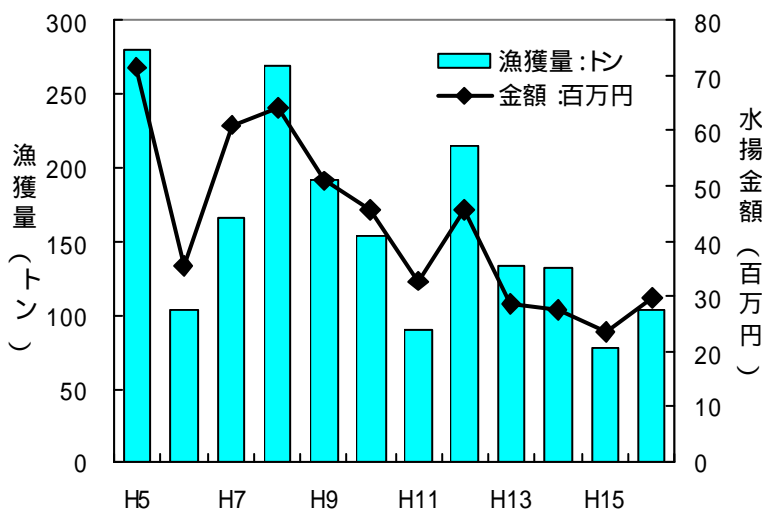


図5 石見地区のトビウオ類の漁獲動向

今年5~8月漁期の石見地区(大田・和江・五十猛・仁摩・浜田)における水揚状況は、漁獲量が104トン(ツクシトビウオ20トン、ホソトビウオ84トン)、水揚金額は2,966万円(ツクシトビウオ829万円、ホソトビウオ2,137万円)

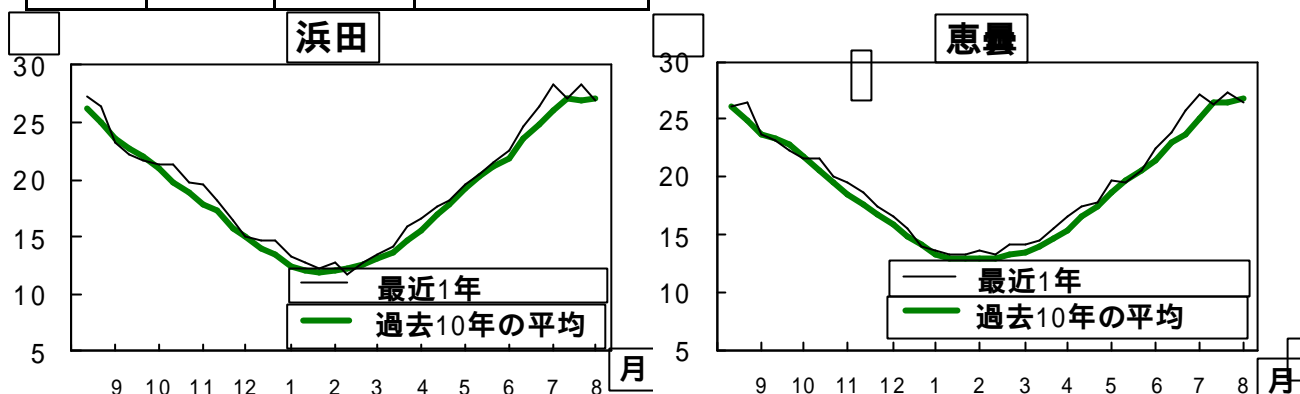
と、平年(過去11年平均)に比べ量は68%、金額は71%にとどまりました。

主な漁業種類別の漁獲量は、とびうお流し刺網55トン(53%)、定置網22トン(21%)、とびうおまき網15トン(15%)でした。

《 8月の海況 》

8月	月平均	平年差	評価
浜田	27.5	+0.5	平年並み
恵曇	26.7	+0.1	平年並み

8月の平均水温は浜田で27.5、恵曇で26.7となりました。前月より浜田、恵曇ともに約1上昇し、両地区ともに「平年並み」の水温となりました。



島根・鳥取・山口県の各水産試験場が実施した海洋観測結果(9/1~9/10)によると、各層の水温は、表層(0m)が21.8~26.5(平年差は-2.6~+1.1)、中層(50m)が10.0~25.7(平年差は-2.2~+4.8)、底層(100m)が3.8~19.9(平年差は-3.7~+4.9)となっていました。

沿岸域の表層水温は約25前後となり、台風の影響があつて隠岐諸島周辺海域以外の広い範囲で、今年初めて平年を下回る水温分布となりました。中、底層では、隠岐諸島周辺海域で平年より2~5も高めとなっていました。また、底層では先月より10前後の水温帯が山口県沖合にまで範囲を広げていました。

山陰沿岸海域の水温は、表層では「かなり低め~平年並み」、中層では「やや低め~はなはだ高め」、底層では「かなり低め~はなはだ高め」となりました。

＜エチゼンクラゲ情報＞

9/21頃-----浜田の沖合底びき網では、北緯35度10~30分、東経131度20~30分の海域で、1網に約1トン入網した。しかし、クラゲが入網しないこともあり、クラゲは偏って分布しているようです。

9/16頃-----県西部の小型底びき網(かけまわし)では、浜田沖130mのところではクラゲが10~20個体入網したことがあった。しかし、通常は130m以深で時々数個体が入網する程度である。

《 8月の漁況 》

【中型まき網漁業】

浜田の中型まき網の総漁獲量は、マアジ主体に273トン、総水揚金額は1億247万円でした。1統当りの漁獲量は91トンで、平年(過去5ヵ年平均)の104%、前年の90%でした。水揚金額は3,416万円で、平年の163%、前年の152%でした。これは、漁獲の主体が豆アジ(尾叉長20cm前後)で、単価が良かったためでした。西郷では、ブリ、マアジ主体に総漁獲量1,303トン、総水揚金額は2億7,027万円でした。1統当りの漁獲量は217トン(平年の56%、前年の78%)、水揚金額は4,504万円(平年の81%、前年の107%)となりました。浦郷ではブリ、カタクチイワシ主体に総漁獲量845トン、総水揚金額は1億3,899万円でした。1統当りの漁獲量は211トン(平年の90%、前年の62%)、水揚金額は3,475万円(平年の137%、前年の159%)でした。県東部では、漁獲量は平年を下回ったもののブリ(尾叉長50cm前後)が漁獲の大半を占め、平年の3~5倍も漁獲されたため、水揚金額はいずれも前年を上回っていました。

【イカ釣漁業】

浜田港に水揚げするイカ釣船(5トン以上)の漁獲量は、ケンサキイカを中心に121トンで平年(過去5ヵ年平均)の98%、前年の68%、水揚金額は1億1,033万円で平年の112%、前年の105%となりました。西郷のイカ釣船(5トン以上)の漁獲量はケンサキイカ主体の20トンで、平年の41%、前年の36%となりました。両地区ともスルメイカが平年を大きく下回っていました。

【シイラまき網漁業】

石見海域(大田市・和江・五十猛・仁摩町)におけるシイラまき網漁業の漁獲量は198トン、水揚金額は2,252万円で漁獲量は平年(過去5ヵ年平均)の101%、水揚金額は67%でした。先月同様ヒラマサが0.2トンと不漁な上、シイラの価格が低かったため水揚金額は平年を大きく下回りました。

【バイかご漁業】

石見および出雲地区の8月のばいかご漁業の水揚げは23.6トン、1,278万円でした。このうちエッチュウバイは15.8トン、749万円の水揚げがありました。また1航海当りのエッチュウバイの水揚げは316.6kg、15.0万円で、量では前年比111%と前年を上回ったものの金額では前年比95%と前年を下回りました。

【沖合底びき網漁業】

浜田港ではムシガレイ、ケンサキイカ、アナゴ・ハモ類、アカムツが漁獲の中心でした。1統当り総漁獲量では12%、水揚金額では25%前年同月を上回りました。特にケンサキイカは1統当り、前年同月の約4倍の漁獲がありましたが、ムシガレイは前年の66%にとどまりました。恵曇港ではムシガレイ、アナゴ・ハモ類、ケンサキイカ、ヤナギムシガレイが漁獲の中心でした。1統当り総漁獲量では前年比91%にとどまりましたが、水揚金額では12%前年を上回っています。魚種別ではケンサキイカ、アカムツ、アナゴ・ハモ類では前年同月の2倍～4倍の漁獲がありましたが、ムシガレイ、ヤナギムシガレイではそれぞれ前年の81%、47%にとどまりました。

【定置網漁業】

台風の影響もあり県東部、県西部、隠岐の3地区とも出漁日数が減少し、漁獲量・水揚金額は前年および平年を下回りました。県東部ではブリが主体で、その他ではカワハギ類、マアジなどが漁獲されています。カワハギ類は前年の約4倍の漁獲量となっています。県西部ではサバフグ類、カンパチ、ソウダガツオが主体で、サバフグ類は前年の約30倍、カンパチは約7倍の漁獲量となっています。隠岐でもカンパチ、マアジ、ブリが主体となっており、カンパチは前年の約40倍の漁獲量となっています。

【釣・縄】

各地区ともに出漁日数が減少し、漁獲量・水揚金額は前年および平年を下回りました。県東部と県西部ではケンサキイカが主体ですが、前年の1/2程度の漁獲量となっています。県西部ではその他にカサゴ・メバル類、ブリなどが漁獲されており、カサゴ・メバル類は前年の約2倍、ブリは約6倍の漁獲量となっています。隠岐ではカサゴ、メバル類、ケンサキイカが主体となっています。

漁獲統計

平成16年8月1日～31日

漁業種類	水揚港	延隻数・統数	主要魚種	1隻(統)1航海当漁獲量	総漁獲量
中型まき網	浜田	50	マアジ	5.5トン	273トン
	西郷	68	ブリ・マアジ	19.2トン	1,303トン
	浦郷	45	ブリ・カタクチイワシ	18.8トン	845トン
イカ釣り (5トン以上)	浜田	691	ケンサキイカ	175kg	121トン
	西郷	258	ケンサキイカ	78kg	20トン
沖合底びき網	浜田	24	ムシガレイ、ケンサキイカ	7トン	169.3トン
	恵曇	8	ムシガレイ、アナゴ・ハモ類	3.6トン	28.8トン
シイラまき網	大田市	16	シイラ	1,869kg	29.9トン
	和江	59	シイラ	1,591kg	93.9トン
	五十猛	27	シイラ	2,093kg	56.5トン
	仁摩	8	シイラ	2,163kg	17.3トン
定置網	浜田	49	カンパチ、カワハギ類	204Kg	10.0トン
	美保関	88	ブリ、カワハギ類、マアジ	350Kg	30.8トン
	浦郷	35	ブリ、スルメイカ、シイラ	126Kg	4.4トン
バイかご	平田市	8	エッチュウバイ	449kg	3.6トン
	大田市	25	エッチュウバイ	479kg	12.0トン
	和江	9	エッチュウバイ	505kg	4.5トン
	仁摩	8	エッチュウバイ	435kg	3.5トン
釣・縄	浜田	1,083	ケンサキイカ、ブリ、アマダイ	19Kg	20.1トン
	五十猛	373	ケンサキイカ、カサゴ・メバル類、メダイ	29Kg	10.8トン

: 1隻(統)1航海当漁獲量は総漁獲量÷延隻数・統数で算出しており、四捨五入した値です。